

四国におけるエコツーリズム

～ 高知県本山町での経験から考える～

平成17年8月



DBJ

日本政策投資銀行
Development Bank of Japan

四国支店

Shikoku Branch

四国におけるエコツーリズム

～高知県本山町での経験から考える～

四国におけるエコツーリズム
～高知県本山町での経験から考える～

【要旨】

1. 四国の自然は、北海道や沖縄、屋久島の大自然とは異なり、大昔より人々が暮らし、育んできた歴史や文化を含んだ自然と言える。日本エコツーリズム協会も、エコツーリズムを「自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること」と定義しているように、歴史や文化も自然と並ぶエコツーリズムの重要な要素と位置づけている。

四国には、四万十川以外にも「四国三郎」の異名を持つ吉野川が流れ、西日本一高い石鎚山があり、小豆島をはじめとした瀬戸内海の多島美、そしてホエールウォッチングができる黒潮の海まで、多種多様な自然が存在する。同時に、祖谷のかずら橋や金刀比羅宮、四国霊場八十八カ所巡りのような多彩な文化資源も存在する。このように四国はエコツーリズムを行うに相応しい素材に恵まれている。本稿では四国観光の現状分析から、四国におけるエコツーリズムの可能性を探ると共に、本山町での取組を通じて得られたエコツーリズム振興のための方策を紹介する。

2. 四国観光の現状をマクロ的に捉えると、四国地域への県外からの観光客数は、本四3架橋(瀬戸大橋、明石海峡大橋、しまなみ海道)の開通による影響を大きく受けている。また高知県に関しては、92年に本州と高知県が高速道路で接続されたことによる影響が若干現れている。これらの要因による観光客数の増加には一過性の部分が存在するものの、長期的にみれば架橋以前と比べて高い水準の観光客数を維持してきたことがわかる。しかしながら、こうした架橋による観光客数増加の追い風も今では衰えつつある。

3. 旅行動態から見た四国観光の特徴としては、四国域内観光の少なさを特徴として指摘することができる。これはフェリーや瀬戸大橋、明石海峡大橋による近畿への交通の利便性や、四国の人々が旅行先として大都市圏を選ぶ傾向が強いことが要因と考えられる。また四国地域の住民は、宿泊旅行回数自体が少ないという結果も表れていることから、四国の人々が四国内の観光資源に対する認識が希薄でその良さを見いだしていないという面や、四国内の他県に対し心理的な距離感を持っているという面もあるのではないだろうか。

4. 四国の個別観光地の現状に目を向けると、これまで観光客誘客のための中心的役割を果たしてきた既存観光地の入込客数の落ち込みが伺え、瀬戸大橋架橋前水準を下回っている例も見られる。一方で観光客は、行きたい観光地として四万十川やホエールウォッチング、足摺岬等の自然や環境と関連する観光地が多く挙げている他、阿波踊りやよさこい祭り、高知の日曜市のような地域文化に根付いたイベントにも関心を示していることから、四国観光に対する観光客の欲求は、有名観光地を単に見て回るような「見物型観光」から、自然や文化(イベント)を体感する「体験型観光」へとシフトしている状況がうかがえる。

5. 旅行者のニーズが見物型観光から体験型観光へシフトしつつある中、エコツーリズムはまさにこうしたニーズに応えうるものであり、新たな観光客数の発掘やリピーターの増加に結びつ

く可能性がある。域内観光の弱さという課題に対しては、エコツーリズムは近隣地域に住む小中学生の教育旅行（修学旅行・移動教室等）をターゲットにしやすいことから、有効な方策になるだろう。さらに、高齢化が進行し若者の少ないといった、地域の活力に係る問題に対してもエコツーリズムの効用があるものと思われる。例えば地域の農業従事者など住民自らが受入主体となることで、地元の魅力を再発見したり、地域に対する誇りを持つたりすることが可能となるほか、旅行者との交流が日常生活における刺激や生き甲斐づくりにもつながると考えられる。四国の一部では特徴ある体験型観光の取組が始まっていることから、今後はこれらの取組が、エコツーリズムの中核資源・プログラムとなる可能性を持っていると言えよう。

6. しかし、四国の多くの地域では取組をはじめたばかりであり、実際にどこからどのように手を付けて良いか分からない、といった悩みを抱えている。そこで弊行では、高知県本山町と連携して同町をモデル地域としたエコツーリズムの活性化策を模索する「エコツーリズム検討会 in 本山町」を開催した。対象地域となった高知県本山町は四国のほぼ中心に位置する典型的な中山間の町である。四国4県を流域に持つ吉野川の源流域にあたり、町の西側には“四国の水瓶”とも呼ばれる早明浦ダムを抱える。森林面積は町域の実に9割にもおよび、現在の人口は4,657人（00年）、高齢化率は34.2%に達する。本山町は役場内にツーリズム推進室を設置し、特にアウトドアスポーツへの取り組みに力を入れている。また町内では、農家民泊やエコツーリズムに関する勉強会を開催する等、住民のエコツーリズムに対する機運も高まっており、実施に向けた素地ができつつある。

7. 「エコツーリズム検討会 in 本山町」ではエコツーリズム先進地とも言われる長野県飯田市でエコツーリズム事業推進の中心的役割を担っており、観光カリスマ百選にも選出されている井上弘司氏をコーディネーターとし、地元自治体やエコツーリズムの担い手となりうる地元代表者、大手旅行関係者などを集め、活発な議論を行った。検討会での意見交換を踏まえ、エコツーリズムを実際に進めていく上でのポイントとして以下の6点の重要性を指摘した、文化、歴史、食に関する資源の活用、観光ニーズと地元資源を踏まえたプログラムづくり、ハード整備に頼らないツーリスト受入施設の確保、地域とマーケットを結び受入窓口の設定、コンセプトとターゲットを明確にしたマーケティング、PR、地域間連携

8. 観光客の嗜好が見物型観光から、体験型観光へと変化していることは、豊かな自然が存在し、その自然の中で文化や歴史を育んできた四国地域にとっては、またとない観光活性化のチャンスと考えられる。こうした中、現在四国に存在する多くの資源をエコツーリズムという切り口で捉え直し、地域住民自身はその過程で地域資源の魅力に気づくことが、四国観光活性化を模索する中でのひとつの打開策になるのではないだろうか。また、観光振興のみならず、都市住民との交流による生き甲斐づくりといった高齢化対策や、就農希望者やボランティアを受け入れることで農村の荒廃を防ぐといった過疎地対策という側面も持っている。そういう意味でエコツーリズムは、今後の四国地域の活性化策を考える上で、大きな可能性を秘めているのではないだろうか。 【担当：後藤 明（e-mail：akgotou@dbj.go.jp）】